

菅原道真と「逍遙遊」

谷 口 孝 介

はじめに

日本文学においていわゆる老荘思想を契機として作品が発想されていることについては、すでに多くの指摘が存する。しかし、古代文学における『莊子』受容については、中世以降の五山における受容の実態が明らかにされつつあるのに比べて、一部の研究を除いては、片言隻語の影響の指摘に留まっているうらみがある。そのような状況において古代の文学が、老荘隱逸思想を趣味・嗜好として採り入れているように扱われることが多いが、ここで論じる菅原道真のばあいには、『莊子』の思想を自己の思想基盤として血肉化しているものといえる。その歌詩作品において『莊子』を重要な契機としたものが多く見られるのである。本稿においては、『莊子』逍遙遊篇の三章を自己の立場の言表の契機とした、『菅家文草』巻四巻軸の三首の歌詩作品を取りあげて、この作品が作られた寛平二（八九〇）年という時点との関連において、道真にとって『莊子』はどのような契機を与えるものであったかを考える。

一、道真と『莊子』

菅原道真が若年のおりから『莊子』を耽読し、生涯にわたってその影響のもとで詩作を試みたことについては、歌詩作品の句々について検証した福島正義氏にすでに指摘がある^{〔1〕}。それによるとなかでも比較的早い時期の作品に次のようなものがある。

此夕無^二他業^一、莊周第一篇。（晩秋二十詠・其九・灘声
161）『菅家文草』巻二）

この詩は題下注によると、元慶元（八八五）年九月二十六日、阿波守平氏某の「河西之小庄」において、「清談之間」に作られた二十題連作の速詠詩の一首である。この即境的であまり飾ることのない詠作の尾聯において、「我性」のおのずからなる「業」として「莊周第一篇」つまり『莊子』巻頭の「逍遙遊」篇があることを明確に言明している。このことは『莊子』逍遙遊篇が道真が衷心より傾倒している愛読書であることをあらわしてい

よう。

道真の『莊子』引用の種々相は福島氏の前掲著書に詳しいが、ここで注目しておきたい点は、それらには次に掲げるようなある傾向が看取されることである。

①韋誕含^レ珠悲^レ老蚌^一、莊周委^レ蛻泣^レ寒蟬。^{〔夢〕}阿滿^一 117
卷二)

②海中不^レ繫舟、東西南北流。^{〔中略〕}老泣雖^レ哀痛、虛舟似放遊。^{〔中略〕}冒進者如^レ此、虛心者自由。始終雖^レ不^一、請我學^レ莊周。^{〔舟行五事・其四〕} 2364^{〔卷二〕}

③海水三翻花百種、形骸外事惣忘^レ言。^{〔近院山水障子詩六首・其四・山屋晚眺〕} 465^{〔卷六〕}

④遇^レ境虛生^レ白、遊談暗入^レ玄。老君垂^レ迹淡、莊叟処^レ身偏。性莫^レ乖^レ常道、宗当^レ任^レ自然。殷勤齊物論、恰恰寓言篇。^{〔叙意一百韻〕} 484^{〔後集〕}

⑤此時傲吏思^レ莊叟、随处^レ空王事^レ尺迦。^{〔官舎幽趣〕} 504^{〔後集〕}

①はふたりの息子を相次いで夭折させた嘆きをいう。②は讃岐守在任中の作で人間社会の現実的な欲得に接してかえって『莊子』の世界に回帰する心性をいう。③は右大臣に任ぜられて厳しさを増す政治的環境のなかで「苦悩する道真の感慨の投影」する作である。④⑤はいずれも大宰府謫居でのやるせない心境のなかで、して幽憤の情を押さえるかのように『莊子』の境地が引用されている。たしかにこれらの例のいくつかに

は、金子彦二郎氏のいうように、道真歌詩作品の「老莊的詩材・詩想」が『白氏文集』のフィルターを通してのものであることが認められる。しかしいま挙げた例のいずれもある種の精神の高揚を言い表すおりに『莊子』が引用されていることから、『莊子』が道真にとって自己の詩作に特別の契機を与える書物であったことが知られるのである。

なかでも寛平二（八九〇）年、讃岐国から帰京後に作られた『莊子』逍遙遊篇の冒頭三章を釈した、各十六句からなる五言排律三首の連作は、道真の『莊子』理解の深度を知るにじゅうぶんな作品である。しかもこの作品で道真は『莊子』に依拠しつつ自己の理想的な政治上の立場をも表明していると考えられるのである。この三首連作には総題がないので、本稿では「逍遙遊」詩と仮称しておく。

二、「逍遙遊」詩と『莊子』成玄英疏

「逍遙遊」詩三首にはこの三首を取りまとめる次のような道真自身による前文が置かれている。

予罷^レ秩歸^レ京、已為^レ閑客^一。玄談之外、無^レ物形^レ言^一。故釈逍遙一篇之三章、且題格律五言之八韻。且叙義理、附之題脚。其措詞用韻、皆挾^レ成文^一。若有^レ暗^レ之者^一、見^レ篇疏決^レ之^一。

ここではこの三首の詩の措辞や用韻が「逍遙一篇之三章」に拠つ

ていることを言ったうえで、「若しこれに暗き者あらば、篇疏を見てこれを決せよ」と、「逍遙遊」詩の根拠が『莊子』成玄英疏にあることを言明している。わたしはまずこの点に注目したいと考える。

当時の『莊子』の代表的注釈書としては、それ自身独自の哲学体系を持つといわれている晉郭象の「莊子注」と、そのもととも忠実な継承者といわれる初唐の道士成玄英の「莊子疏」とが存する。藤原佐世撰『日本国見在書目録』（道家）には現伝しないものも含めて種々の『莊子』注釈書が二十一部著録されている。いうまでもなくそこには「莊子三十三」郭象注、「莊子疏十」西華寺法師成英撰」とがそれぞれ録されており、すこし後の具平親王撰の『弘決外典抄』においても『莊子』の注釈書としては、郭象注と成玄英疏とを使用していることが知られる。さらに留意しておきたいことは、明治三十七（一九〇四）年刊行の島田翰『古文旧書考』（巻一・南華真經注疏解經三十三卷）が唐代における『莊子』刊行の歴史を述べるなかで、「於是有併象之注本為二十卷者」又「有合玄英義疏為十二卷者」上。然是時疏与注未合併也。至宋始有注疏舊本」というように、今日見られる注と疏とが合体した注疏舊本の形態となつたのは宋代になつてからだという点である。つまり平安初期にあつては、『莊子』の注釈書はいずれも『日本国見在書目録』にあるように単注本、単疏本であつたのである。道真はこのような状況においてあえて意識的に成玄英疏を選択して『莊子』を読んでいたこととなり、前文の「篇疏を見てこれを決せよ」は、この歌詩作品の理解には成玄英疏がなくてはならないこと

を言明したものと考えられるのである。

そこで本節では道真の「逍遙遊」詩三首が、「其措詞用韻、皆拠成文」（前文）というように、成玄英疏の措辞に拠つて表現されている様相を、郭象注と比較対照しつつ具体的に検証しておく。

「逍遙遊」詩三首には「且叙義理、附之題脚」（前文）というように、各詩の題下に「述曰」として割注が付されている。その箇所も成玄英疏に拠るところが多いのであわせて掲げておく。

①

北溟章。「述曰、鯤為鵬鳥、自北徂南。蜩与鸞鳩、
其宏大。自得之場雖異、逍遙之道惟同。唯此章、
舉鳩略、而舉蜩詳。明鯤龐而鵬密。故偏発鵬蜩二
虫之性、遂終小大一致之篇。」

举小將均大 小を挙げて將に大に均しくせんとす、

惟鵬自对蜩 惟れ鵬自ら蜩に對す。

海鱗波森森 海鱗波森森たり、

泥蛻景蕭蕭 泥蛻景蕭蕭たり。

变化談同日 变化同日に談ず、

形容類各霄 形容各霄に類す。

無時頻決起 時となく頻りに決起す、

有处積扶搖 扶搖を積むに処あり。

控地榆枋鬱 地に控げられて榆枋に鬱ぶ、

垂天羽翼調 天に垂りて羽翼を調う。

効勞空半歳 効勞は空しく半歳なり、

逸樂不終朝 逸樂は朝を終えず。

野馬吹相息
班鳩咲共嬌
二虫雖異趣
適性同逍遙

野馬吹きて相息う、
班鳩咲いて共に嬌る。
二虫趣を異とすと雖も、
性に適いて同しく逍遙す。

②

小知章。「述曰、宋_レ采_レ忘_レ有_レ、禦寇得_レ仙、大智也。五_レ等殊_レ方、諸侯就_レ事、小智也。冥靈在_レ楚、彭祖仕_レ周、大年也。蟪蛄夏生、朝菌暮死、小年也。然而物安_レ天性、理任_レ自然、羨欲累絶、逍遙道成。唯有_レ采公咲_レ幸官之祿、列子御_レ冷然之風、未_レ得_レ遭_レ無_レ、猶憂_レ有_レ待。未_レ若_レ無_レ功之神、無_レ名之聖、能馭_レ六氣、遠遊無窮、逍遙之智足矣、無_レ待之心適焉。故遍拳_レ小大之性、說以_レ神聖之遊。此章更載_レ大椿花葉之長年、尺鷃鯢鵬之遊放、義為_レ重疊、略而不_レ取也。」

知分明又闇
知は分かる明なると又闇きと、
年は定まる短くして能く脩し。
内外先双遭
内外先ず双ながら遭らば、
逍遙便一遊
逍遙便ち一遊ならん。
堯臣猶歷夏
堯臣は猶お夏を歷たり、
曹后不知秋
曹后は秋を知らず。
勁節冥靈老
勁節冥靈老いたり、
浮生日及休
浮生日及休す。
共慙相企尚
共に慙ずらくは相企尚すること、
多恐暫拘留
多く恐るらくは暫く拘留すること、
有待何称善
待つことあるは何ぞ善と称せん、

③

無為我道周
采公干祿笑
列子御風憂
好是無名客
茫茫六氣幽

無為にして我周しと道わん。
采公祿を干むることを笑う、
列子風に御せらるるを憂う。
好し是れ無名の客、
茫茫として六氣幽なり。

堯讓章。「述曰、堯帝拳_レ炬火浸灌之喻、將讓_レ天下於許由。許由說_レ鷦鷯偃鼠之心、更歸_レ堯帝於天下。聖人賢者、性命雖殊、黃屋青山、逍遙尚一。故叙堯許之有情、明_レ優遊之無_レ別也。」

推賢堯授手
寄身許慙顔
四海君功大
孤雲我性閑
穎川清石水
箕嶺老松山
送日蔬食足
臨煙華戸開
既知尸祝用
誰為実賓煩
鳳曆何無主
龍飛欲早還
鷦鷯從取栗
浸灌莫辛艱
向背優遊去

賢を推して堯手を授く、
身を寄せて許顔を慙す。
四海君が功大なり、
孤雲我が性閑なり。
穎川は清石の水なり、
箕嶺は老松の山なり。
日を送りて蔬食足り、
煙に臨みて華戸開く。
既に知る尸祝の用、
誰か為さん実賓の煩。
鳳曆何ぞ主なからん、
龍飛早く還らんとす。
鷦鷯栗を取るに従い、
浸灌辛艱することなかれ。
向背し優遊として去る、

形体一世間 形体は一世の間。

この三首は『莊子』（内篇・逍遙遊第一）の巻頭から堯と許由との問答の箇所までを三章に分かつて、各章の「義理」を題下注として示し、それぞれ五言十六句にわたる排律に詠み込んだものである。その三章とはそれぞれ、「北冥章」は『莊子』（逍遙遊篇）冒頭の「北冥有魚」から「之二虫又何知」までの鵬鯤と蜩鳩との対比を語る箇所であり、「小知章」はつづく「小知不及大知」から「至人無己、神人無功、聖人無名」までの種々の大小の対照を通して絶対の境地を説く箇所であり、「堯讓章」はつづく「堯讓天下於許由」曰「尸祝不越樽俎而代之矣」までをいう。

まず「北冥章」について成玄英疏に拠る表現を見る。道真詩の本文に付した傍線部 a e f g h はそれぞれ次の箇所に拠っている。

【注】苟足於其性、則雖大鵬無以自貴於小鳥、小鳥無羨於天池、而榮願有余矣。故小大雖殊、逍遙一也。

【疏】蜩、蟬也。生七八月、紫青色、一名蜩螗。鵲鳩、鵲鳩也、即今之斑鳩是也。決、卒疾之貌。搶、集也。亦突也。

枋、檀木也。控、投也、引也。窮也。奚、何也。之、適也。蜩鳩聞鵬鳥之弘大、資風水以高飛、故嗤彼形大而劬勞、欣我質小而逸予。且騰躍不過數仞、突榆枹而栖集、時困不到前林、投地息而更起、逍遙適性、樂在其中。何須時經六月、途遙九萬、跋涉辛苦、南適胡為。以小笑大、夸企自息而不逍遙者、未之有也。

『莊子』の同一本文に対する郭象注と成玄英疏とを省略せずに掲げた。注は該当する『莊子』本文の大意を述べるのに対して、疏においてはさらに細かく字義の訓詁を示したうえで、ほぼ逐次に解釈を施している。「逍遙遊」詩がこの箇所において注に拠らずに疏の傍線部分の表現に拠っていることは明らかである。さらにb「変化」は、疏の「故化魚為鳥、欲明變化之大理也」に拠っており、c「形容」は、「且形既遷革、情亦隨變」に、d「霄」は、「凌摩霄漢、垂陰布影」にそれぞれ拠った表現であることが分かる。

次に「小知章」の検討を行う。まず道真詩の首聯の対句1とo「企尚」とは次の箇所に拠った表現である。比較対照のために同一本文に対する郭象注とともに掲げておく。

【注】物各有性、性各有極、皆如年知、豈踐尚之所及哉。自此已下至于列子、歷拳年知之大小、各信其一方、未有足以相傾者也。（下略）

【疏】夫物受氣不同、稟分各異、智則有明有暗、年則或短或長、故拳朝菌冥靈、宰官榮子、皆如年知、豈企尚之所及哉。故知物性不同、不可強相希効也。

道真詩首聯の対句1は、注の「皆知年知」を具体的に「知」の側面と「年」の側面とに分けて対句で表現した疏の1に拠ったものである。また道真詩のo「企尚」については、注の「跛尚」と疏の「企尚」とはこいねがうという意で同義であるのだ

が、詩では疏の「企尚」の語形を採用していることが分かる。
ついで道真詩の第二聯の前句 m も「定平内外之分」の「莊子」本文に対する次の疏の表現に拠っている。

【注】内我而外物。

【疏】榮子知内既非我、外亦非物、内外双遣、物我兩忘、故於内外之分定而不忒也。

ここでも道真詩の表現は疏に拠りつつ「双」の対として、疏の「不忒」を「一」と巧みに置き換えて言い表していることが分かる。また題下注と詩の第七聯において宋榮子と列子とを対句で表現した i k p q は、疏の宋榮子についての「榮子雖能忘有、未能遣無、故笑。宰官之徒、滯於爵祿、虛淡之人、猶懷嗤笑、見如是以不齊」や、列子についての「得風仙之道、乘風遊行、冷然輕舉、所以稱善也」などの表現を取り込んで巧みに対句に仕立てたものである。また j「五等」は疏の「国是五等之邦」に、n「歴夏」は疏の「歴夏経殷至周」にそれぞれ拠った表現である。

最後に「堯讓章」の検討に移る。題下注の r「炬火」は、疏の「燭火、猶炬火也。亦小火也」に、同じく t「黃屋」および詩の u「四海」は、疏の「許由寡欲清廉、不受堯讓、故謂堯云、君宜速還黃屋、歸反紫微、禪讓之辭、宜其休息。四海之尊、於我無用、九五之貴、予何用為」にそれぞれ拠った表現である。さらに詩の十二句目の「龍飛欲早還」もいま掲げた疏の表現に拠りつつ、疏に見える天子の位を表す

「九五」を『易』(乾)の「九五、飛龍在天、利見大人」の卦辞に基づいて「龍飛」としたものである。また詩の x「潁川」と「箕嶺」との対語は、疏の「許由偃蹇箕山、逍遙潁川、膾炙榮利、厭穢声名」に拠って、許由の俗世から離脱した安息の場を表す。同じく y の「蔬食」と「華戸」との対語も疏の「許由安茲蓬壺、不顧金閭、樂彼蔬食、詎勞玉食也」に拠って、許由の清貧のさまをいう。

前文に「其措詞用韻、皆拠成文」というように、道真はこの「逍遙遊」詩三首を製作するにあたって、詩の表現の至るところに成玄英疏に拠る措辞を用いていることが以上の検証で明らかとなった。それではなぜ道真はこの詩を作るのに『莊子』本文や郭象注に拠らずに、あえて意識的に成玄英疏を選択したのであろうか。その問題は節を改めて論じることとする。

三、郭象注と成玄英疏と

道真が「逍遙遊」詩三首を成玄英疏に拠って製作した背景としては、成玄英疏が広く用いられていた点がまずは考えられる。日本古代の漢籍受容のありかたは、いっばんに本文単行ではなく、注疏を伴った形で受容されていた。「養老令」の「学令」には大学における教授に使用されるべき諸経の公定注釈書が規定されている。ただし小島憲之氏が詳細に検討したように、この「学令」の規定は必ずしも当時の日本の実情を反映したものではなく、「唐令」の規定をそのまま当てはめたものなのである。たとえば『論語』のばあい、「学令」に規定のある後漢の「鄭

玄注」はじつさいには用いられていず、魏の「何晏集解」や「学令」には規定を見ない梁の「皇侃義疏」が使用されていた実態が明らかになっている。このように日本古代における漢籍注釈書の利用の実態は、注よりも疏、さらには正義の類に拠る傾向が認められるのである。「莊子」においてもこの傾向は変わらないものと考えてよいだろう。つまりこのことが道真の成玄英疏利用の要因のひとつとしてとりあえずは考えられるのである。

ただ藤原克己氏がいうように、この三首の詩は、「政治に参加すること」「逍遙」であり「無為」なのである」とする「郭象の逍遙」一致思想のうちに、その精神の自由と安定のよすがを模索したものであった^⑤とするならば、やはりなぜ直截に郭象注を用いなかっただのかという疑問が残る。わたしはその答えとして疏が広く用いられていたこと以上に、ひとつには郭象注の難解さをその理由として指摘することができ、いまひとつはより本質的な問題として郭象注と成玄英疏との思想的な相違によるものと考えるのである。

郭注の難解さは「莊子の大意」を原理的に把握しようとする郭象自身の注釈態度に起因している。そのことは成玄英が次のように指摘している。

是以莊子援禪讓之迹、故有燭火之談。郭生察無待之心、更致不治之說。可謂採微索隱、了文合義、宣尋其旨況、無所稍嫌也。

ここで成玄英は郭象の注釈態度について、「微を採り隠を索め、文を了り義に合うと謂いつべし」と『莊子』本文の深意を探り出そうとするものだとして述べている。同様の指摘ははるか後代のものではあるが、江戸時代中期の儒者、湯淺常山の『文会雜記』に服部南郭の説として次のように見える。

郭象は中中これにて句ごとに解すると云うやうなる下等の心にあらず。やはり莊子をつかまへて清言する心なり。それゆへ郭象注にて、莊子をすますと云うやうなることはならぬこと也。

ここでもやはり郭象注の注釈書としての独自の性格が述べられており、「若しこれに暗き者あらば、篇疏を見てこれを決せよ」と道真が前文でいう、『莊子』に習熟していない者が見るべき注釈書としては、郭象注はふさわしくなかったのである。

次に道真が成玄英疏を用いたより本質的な理由と考えられる郭象注との差異について検討する。陶建國氏は、『莊子』(逍遙遊篇)の「堯讓天下於許由」の一段を引いて、これに対する郭象注の性格を、「向郭理想之聖人、当係集儒家之『有為』与道家之『無為』於一身」と簡潔に言い表している。その郭象の企図するところについては戸川芳郎氏が次のようにいう。

有為の現象世界の、世俗の政治は、無為の「不治」によって、はじめて現実体となりうる。無為の本体によって秩序づけられない、現実の個別(堯・許由の治)にはならん相互

の因使關係を認めるわけにはいかない。隱遁者の許由の生活をも、有為の人間社会をも、すべてをおおう道こそ、為政者にとって必要なことであつた。

つまりは郭象注とは、為政者の立場に立つた立言なのである。それは六朝士大夫における「帝王権がいよいよ中国文化の根源たり得なくなつてきた」時代状況に即した、いかにして臣下としての自己が帝王的存在である聖人たりうるかという、希求のしからしむるところであつた。このように郭象の逍遙一致・万物斉同の思想の背景には、魏晉時代における帝王の權威の失墜とそれに対応しようとする貴族たちの希求とがあつたわけである。

いっぽう成玄英疏は、砂山稔氏によると「郭象の政治思想のまた最も忠実な継承者である」というが、郭象のような魏晉貴族の持つ如上の希求を持たない初唐の道士である成玄英の疏は、その政治的な側面において隱微な形で示しているのである。

その差異が見出されるのが、道真の「逍遙遊」詩の第三首目「堯讓章」が拠つてゐる次の箇所である。

【注】夫能令「天下治」、不「治」天下者也。故堯以「不治」治之、非「治」之而治者也。今許由方明「既治」、則無「所」代之。而治美由堯、故有「子治之言」、宜忘言以尋其所。況。而或者遂云、「治」之而治者、堯也。不「治」而堯得「以治」者、許由也。斯失之遠矣。夫治之由「乎不治」、為之出

乎無為也、取於堯而足、豈借之許由哉。若謂拱默乎山林之中「而後得」、稱無為者、此莊老之談所以見「棄於塗」。當塗者自必於有為之城而不「反」者、斯之由也。

【疏】治、謂理也。既、尽也。言堯治天下、久以昇平、四海八荒、尽皆清謐、何勞讓堯、過為辭費。然觀莊文則貶堯而推許、尋郭注乃劣許而優堯者、何耶。欲明放勛（堯の字）大聖、仲武（許由の字）大賢、賢聖二塗、相去遠矣。故堯負宸汾陽而喪天下、許由不夷其俗而獨立高山、日照偏溺、斷可知矣。是以莊子援禪讓之迹、故有燭火之談。郭生察無待之心、更致不治之說。可謂採微索隱、了文合義、宣尋其旨況、無所稍嫌也。

いま掲げた箇所は、『莊子』本文における、堯が許由に天下を讓る意思を示したのに対する許由の発言、「子治天下、天下既已治也」についての注と疏とである。この注においては、閔正郎氏が「治めることがないというのは、熱鬧の地を去り山林の中に隱棲することではない。塵寰に在つて煩わされず靜謐を保つことである。ここに郭象は老莊についての一般的評価としての逃避性をかくの如く轉換する」と解説するとおり、堯の立場に立つて、「當塗者」つまりは為政者の理想的なあり方を説いている。その『莊子』本文と郭象注との逆転を成玄英は、「然觀莊文則貶堯而推許、尋郭注乃劣許而優堯者、何耶」と問題とする。これに対する成疏の立場は、堯を「大聖」、許由を「大賢」として、「賢聖」二塗、相去ること遠きを明らかに

せん」としたものである。

道真是「堯讓章」において、傍線部分sに見るようにこの成疏の立場に拠っており、聖人と賢者との明確な区別を前提としている。しかも三首のうちこの作品のみが、第二聯に「四海君功大、孤雲我性閑」とあるように、許由の立場に立つての詩作になっている点も注目すべきである。つまりここで道真是、君主を大聖とし、自己をそれを輔翼する賢者に見立てて、聖人による賢者を用いる用賢政治の理想像を述べたものと考えられるのである。

用賢政治の理想的なあり方を、道真是「堯讓章」の題下注において、「故叙堯許之有_レ情、明_レ優遊之無_レ別也」と述べ、詩では結聯において、「向背優遊去、形体一世間」と詠む。これらはいずれも成疏の「帝堯禪讓、不治_二天下_一、許由亦不去_二彼山林_一、就_中茲帝位_上。故注云、帝堯許由各靜於所_レ遇也已」を受けたものである。しかしここで注目したいのは、疏が引く注の「靜_二於所_レ遇_一」という表現を、『莊子』および注疏に見えない「優遊」という語に置き換えている点である。「優遊」は『毛詩』(大雅・卷阿)の「伴_二輿爾游矣、優游爾休矣_一」に出る語で、この二句について鄭玄注は次のように解説する。

伴輿、自縱弛之意也。賢者既来、王以_二才官_一秩_レ之。各任_二其職_一。女則得_レ伴輿而優遊自休息也。孔子曰、無為而治者、其舜也与。恭_レ己正南面已。言任_レ賢故逸也。

この鄭玄注に引かれている『論語』(衛靈公篇)の一章について

て、楠山春樹氏は「そこにいる無為とは本来的には任官に人を得たという舜に対する賛辞であって、その意味では明白な儒家言である¹⁾」と言う。鄭玄は『論語』のこの一章をこの意味に解して「卷阿」の注として引証しているのである。このように「優遊」とは儒教の徳治政治の理想的な様態という語であることが分かる。さらにこの語は、魏何晏「景福殿賦」(『文選』卷十二)の「莫_二不_レ優游以自得_一、故淡泊而無_レ所_レ思。歷_二列辟_一而論_二功、無_二今日之至治_一」に見えるように、理想的な治世における人びとの満ち足りた心性を言い表し、盛唐李白「東武吟」の「清切紫霄迥、優遊丹禁通」などでは、理想的な君主に仕える臣下のさまを言うようになる。

これらを踏まえて道真詩においては、君主である「聖人」と臣下としての「賢者」との両者がそれぞれ十分に能力が発揮できる状態であることをいう。結句の「形体一世間」は、『淮南子』(本經訓)の「聖人者由_二近知_一遠而万殊為_二一。古之人同_二氣于天地_一、与_二二世_一而優游」や晉嵇康「与_二山巨源_一絶交書」(『文選』卷四十三)の「与_二一世_一同_二其波流_一、而悔吝不生」などの「与_二二世_一」の用法を参照すると、理想的な世の中においては作為をせずに時勢に身を委せるままでよいと言っていると考えられる。道真はこの時点での立場上、「閑客」の「玄談」というスタイルを採りながらも、結聯においてははしくも儒教的徳治政治における用賢政治の理想像を「儒家言」をもって詠じていたのである。

「逍遙遊」詩とほぼ同時期の作品として、寛平二(八九〇)年閏九月十二日の「未_レ旦求_二衣賦_一一首 516」(『菅家文章』卷

七)がある。これは宇多天皇の求めに応じた作品で、その序のなかに勅を引いて、「未^レ旦^レ求^レ衣、欲^レ陳^二人主思^レ政之道^一」とあるように、君主が夜明け前から政務に励む姿勢を主題とするものである。その賦のなかにも次のような表現が見える。

褰^レ裳以^レ礼、悦^レ其松柏有^レ心。引^二領於賢^一、賤^二彼珠玉無^レ脛。知^レ人則哲、從^レ諫惟聖。

ここにおいても君主の理想的なあり方として、貞心をもつて諫言を行う賢者を用いることをいう。このおり道真は、序に「臣道真、南郡罷^レ官、北闕通^レ籍。忝^二随^二大夫登^レ高之後^一、敢上小子狂簡之章」とあるように、讃岐国から帰京して次の任官を待っているところであつたが、この作品は宮中において「感動を詩や文に託して表現」すべき「大夫」の立場で作られたものである。つまりこの時期に道真は「大夫」としては「未^レ旦求^レ衣賦」において、「閑客」としては「逍遙遊」詩において、それぞれ自己の政見を言表していたと考えられるのである。

四、閑客の玄談

最後に「逍遙遊」詩三首がこの時期に前文の「閑客」という自己規定のもとで作られ、『菅家文章』巻二・四の掉尾に位置づけられた意味を考えておきたい。

「逍遙遊」詩三首が置かれている『菅家文章』巻四の終末箇所の十三首は、「春日感^二故右丞相旧宅^一」323の題下注に「自此

以下十三首、罷^レ秩歸^レ京之作」とあるように、寛平二(八九〇)年の春から秋にかけての、讃岐守の任期を終えて次の任官を待つ間の作である。「書^レ懷奉^二皇諸詩友^一」327の題下注にも「予州秩已滿、被^レ符在^レ京。分付之間、不^レ接朝士、故作^レ之」とあるように、道真は国守の任期満了後、正式の交替を待たずに事務引き継ぎを残したまま帰京したようである。したがって事務引き継ぎが終了していないうちは、公的に官僚と接することができなかつたのである。この年の重陽宴での作「九日侍^レ宴、同賦^二仙潭菊^一。各分^二二字^一、応^レ製」328が残るが、これについても、藤原為房『撰集秘記』(巻十七・九日節会事)傍書の「清涼記」に、「寛平二年、巨勢文雄・安倍興行、雖^レ進^二本任放還^一依^二新格旨未^レ下^一諸司、前讃岐介菅原道真、未^レ放還^一間入^レ京。件三人式部省不^レ載文人簿、仍有^レ勅召^レ之」と見えることから、九月九日の時点でもいまだ「放還」つまり正式の離任が認められていず、宇多天皇の特別の勅により公宴に召されていたことが分かる。

さきに挙げた「書^レ懷奉^二皇諸詩友^一」327の頸聯には、「不^レ觀^二釈奠都堂礼^一、何賜^二重陽内宴盃^一」とあり、公宴において詩臣としての活動の場がないことを言う。このように「朝士」として公的に詩を発表することができない時期の自己を、道真は「閑客」と規定していたのである。したがってこの時期に政見・思想を表明しようとする、「玄談」という手段をとらざるをえなかつたと考えられる。前文の「予秩を罷^レめ京に歸り、已に閑客と爲る。玄談の外、物として言に形すことなし」は、『毛詩』大序の「詩者志之所^レ之也。在心為^レ志、發言為^レ詩。

情動「於中」、而形「於言」に拠りつつ、「閑客」たる道真としては「玄談」を描いては自己の志を表明する方途がなかったことをいうのである。「故に逍遙」篇の三章を釈し、且つ格律五言の八韻を題す」とあるように、「玄談」としての「逍遙遊」詩三首はこの時期の道真の志を言表したものと考えられるのである。

玄談詩であるこの三首は道真にとって、朝政から隔てられた渴望感を癒す切実なものであり、その題材を『莊子』(逍遙遊篇)に採ったのも、『世説新語』(文学篇)に「莊子逍遙遊篇、旧是難処、諸名賢所可鑽味、而不能拔理於郭(象)・向(秀)之外」と、それが「名賢」の研究味読するべきものであると考えられていたことによる。そのことは第三節で見た「堯讓章」において自己を「賢者」に見立てた姿勢と相通じるものであり、たんなる趣味的な隠逸のポーズなどではなかったのである。『莊子』の解釈を成玄英疏に拠ったことも、志の発露であるこの「玄談」詩をひろく「朝士」に理解してもらいたいからである。そのためにも難解な郭象注ではなく、『弘決外典抄』に多く引用されていることから明らかにように当時流布していた成玄英疏が用いられたのである。

ところで『菅家文章』の作品の配列は、おおよそ作品の成立時期の順になっている。しかし「逍遙遊」詩三首を含む巻四の終末部に關しては作爲のあとが感じられる。巻軸の「逍遙遊」詩三首の直前の「霜菊詩 332」は、題下注に「同日序、并未旦求衣賦在別巻」とあるように、第三節で見た寛平二年閏九月十二日の作である「未旦求衣賦」と同日の作である。その

序のなかにさきに見たように「北闕に籍を通ず」とあることから、「未だ放還せず、(中略)式部省文人簿に載せず」とあつた九月九日よりこの閏九月十二日までの間には、道真は正式に後任の国守との交替を完了していたものと考えられる。翌寛平三年二月に藏人頭に任じられるまでは散位ではあるが、「閑客」というにはあたらな。したがって「霜菊詩」は配列とは逆に「逍遙遊」詩三首のあとに作られたものと考えられるのである。

この三首を成立時期に逆らつてとくに巻四の巻軸に据えたのは、『菅家文章』編纂時の意図的な作為と考えられる。昌泰三(八九八)年八月十六日に醍醐天皇に『菅家文章』を献上したおりの奏上文「献家集状」(増補本『菅家後集』)において、「仁和年中の讃州客意」の作は「微臣の道を失うことを叙ぶるなり」と位置づけられていた。その「讃州客意」の作である巻三・四の掉尾に「閑客」の「玄談」としての「逍遙遊」詩を置くことで、宮廷詩人としての活動の場を失った時期の志の表明のあり方を明確に示したものと考えられるのである。

おわりに

道真はおりにふれて自己の本領が宮廷詩人であることを揚言している。その力量がもつとも発揮される式部少輔、文章博士の二官から、外吏である讃岐国守に任じられた四年間にはこれにその感が強い。そのような本領を発揮できない環境において、かえって「讃州刺史本詩人」(題「駅楼壁」 243)『菅家文章』巻四)と、自己の詩人としての本性があらためて自覺されるこ

とが多かったのである。その間の作を収める卷三・四の掉尾に位置づけられた「逍遙遊」詩三首は、本来の自分のあり方ではない「閑客」という立場を逆を利用して、「玄談」として自己の政見を述べたのであった。この方法が卷五巻頭の「閏九月尽、灯下即事、応製³⁶⁾」に見られる密宴詩に受け継がれ、寛平年間の治世への参画の時期の作品が生みだされることとなるのである。³⁷⁾「逍遙遊」詩三首が卷二・四の掉尾に置かれていることには、このように「微臣の道を失」った時期の「讀州客意」の作と、「天子の文を好むに遇う」ことができた「寛平以降の応制雜詠」との架橋としての意味があったのである。

〔注〕

- (1) 福島正義氏『日本上代文学と老莊思想』高文堂出版社、一九八三年。
- (2) 後藤昭雄氏『平安朝漢文学論考』おうふう、一九八一年、一四一頁。
- (3) 金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集』道眞の文学研究篇 第二冊』藝林舎、一九七八年、一四三頁。
- (4) 小島憲之氏『国風暗黒時代の文学』上』塙書房、一九六八年、二五三頁〜三三三頁。
- (5) 藤原克己氏『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学出版会、二〇〇一年、二二八頁。
- (6) 陶建国氏『兩漢魏晉之道家思想』台湾、文津出版社、一九八六年、六六〇頁。
- (7) 戸川芳郎氏『漢代の学術と文化』研文出版、二〇〇二年、二五四頁〜二五五頁。
- (8) 荒牧典俊氏『魏晉思想と初期中国仏教思想』序―『東方学報 京都』四七、一九七四年。
- (9) 砂山稔氏『隋唐道教思想史研究』平河出版社、一九九〇年、二五七頁。

- (10) 関正郎氏『莊子の思想とその解釈―郭象・成玄英―』三省堂、一九九九年、二四三頁。
- (11) 楠山春樹氏『道家思想と道教』平河出版社、一九九二年、四二五頁。
- (12) 大曾根章介氏・金原理氏・後藤昭雄氏校注『新日本古典文学大系 二七 本朝文粹』岩波書店、一九九二年、三頁。
- (13) 谷口孝介『宇多天皇―道眞を登用―』『国文学 解釈と鑑賞』六七―四、二〇〇二年。

〔付記〕

本稿は、平成十六年度文部科学省科学研究費補助金基礎研究C「日本古典和歌における中国文学受容についての通時的研究」(研究代表者 芳賀紀雄教授)による研究成果の一部である。

(たにくち こうすけ 筑波大学人文社会科学部研究科講師)